

## 審査結果報告書

平成 29 年 2 月 7 日

主 査 氏 名 石井正浩



副 査 氏 名 岡本浩嗣



副 査 氏 名 佐藤俊哉



副 査 氏 名 小泉和幸



1. 申請者氏名 : DM13003 飯田祐一郎

2. 論文テーマ :  
心筋症における左室壁運動の局所壁運動低下の臨床的意義についての臨床研究

3. 論文審査結果 :

特発性拡張型心筋症(IDCМ)は『左室拡大と左室収縮能障害を特徴とし、びまん性の収縮障害を引き起こし得る異常な負荷状況(高血圧や弁膜症)および冠動脈疾患の合併がない疾患群』と定義される。研究Ⅰとして IDCМ における局所壁運動異常(SWMA)の臨床的意義を検討した。全対象例のうち、23 例で SWMA を認めた。SWMA+群は、びまん性壁運動低下群( $n=62$ ; SWMA-)に比して、退院時からの心血管イベントが有意に多かった( $p < 0.001$ )。特発性拡張型心筋症において、局所壁運動低下は不良な予後と不十分な左室逆モデリングを予測する独立した予測因子である。研究Ⅱとして心サルコイドーシス(CS)における SWMA が有する臨床的意義の検討をした。2001 年から 2013 年に入院した連続症例、CS 34 例と IDCМ 324 例を対象とした。SWMA は、CS と IDCМ のそれぞれ 22 人(54%)および 54 人(17%)に認められ、CS では左室基部により多く見られた(65% vs. 16%,  $P > 0.0001$ )。CS において SWMA+は有意に心血管イベントが多かった。CS において SWMA は予後不良を予測し、その部位診断が IDCМ との鑑別に重要である。この 2 つの研究は臨床的意義が高いと評価される。また発表も的確で質問にも適正に答えていた。よって本論文は学位論文に値する。